

色葉字類抄の声点小考

梅崎, 光
九州大学文学部助手

<https://doi.org/10.15017/9425>

出版情報 : 語文研究. 79, pp.12-21, 1995-06-04. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

色葉字類抄の声点小考

梅 崎 光

0. はじめに

三卷本『色葉字類抄』における声点に関する研究には、すでにおくの蓄積がある。^(注1)このうち、漢字に付された声点に関してつぎのような意見がある。

本書の所謂漢音の方は、大多数、韻書通りの声点を有している。

これは当然のことである。が、別に、特に、上声全濁字の去声

化は、留意しておかなければならない現象である。量的には、

略々、半ばそうなる。^(注2)

ここでもふれられているように、漢音には全濁上声字の去声化が反映しているといわれる。^(注3)が、すべての漢音資料が全濁上声と去声とをまったく区別しないわけではない。上声の比率のたかいものから去声の比率のたかいものまで資料ごとに差があるという。^(注4)そして、そうした差を「我が国に入って後の変化ではなく、それぞれの資料が伝えた漢音の母胎の違いによるもの」という「漢音の複層性」^(注5)ととらえる仮説も提出されている。

そのような仮説の当否はともかくとして、^(注7)漢字音の声調資料として『色葉字類抄』の価値を検討しようとするならば視野にはいってこざるをえない問題のひとつにこの全濁上声字の去声化が存在すること、高松氏の言にもあるとおりである。

一方、この資料の漢字に対する声点については、つぎのように韻書の四声との関連も暗示されている。高松氏によれば、「単字掲出の、音形は漢音形を採るもの」のうち「篇へん(敷仙開4 平)、里り(来止開3 上)、寧(見彌開3 上)、佳(並齊開4 上)、鱗(来震開3 去)、電(来震開4 上)、電(来震開3 去)、電(来震開4 上)、破(滂過合1 去)」のごとく疑問の声点をもつものが「三十字を幾許か越える程度の量」存するとのことである。そしてそれ以外のものについては、「皆、機械的に広韻通りの声点が指されていてさうである。即ち、この場合は、広韻の四声をその音形と共に記すのが、本書の原則と考えられるのである。特にその単字の我が国的声点、つまりは我が国的字調(声調)を教えるものではないと判ぜられる」との解釈がしめされている。^(注8)

とすると、『色葉字類抄』においては、漢音の字音声調の調値をし

めず上声点と、韻書における調類をしめすにすぎない上声点とが併存していることになる。

ここがかんがえてみなければならぬのは、もし単字に対して機械的に韻書どおりの声点を付したのなら、そうした韻書による知識の影響が単字以外の部分に対してもおよんでいるのではないかという可能性である。この資料における漢音の全濁上声字には上声調のものとして去声調のものが半々とのことであったが、その前者にはそうした韻書の調類をしめすものが混在しているかもしれない。

また、そもそも声点の平上去入が広韻の四声とほぼ一致するにしても、そこからただちに《広韻の四声を機械的にうつすのが原則である》と一般化してよいものだろうか。漢音の声調が「大多数、韻書通り」であるからには、漢音の声調が表示すべく声点が付されたとしても、結果的にその声点の平上去入は韻書の四声とほぼ一致する道理なのである。

みぎのような疑問点を検証するためにも、漢音の声調体系が広韻の四声とずれる全濁上声字の声点に注目してみるのがよいのではなからうか。このような観点から、当面のあたりををつけるべく小規模ながら調査をおこなった。以下その結果について説明する。

1. 調査の方法

上声全濁字が『色葉字類抄』でどのように差声されているかについて、サンプリングによる調査をした。ここで調査の対象としたのは、『聚分韻略の研究』^(注9)巻末の漢字索引において上声全濁の音をもつ漢字である。

同一の全濁上声字の用例を当該の字のもとにまとめ、それを(Ⅰ、上声点の例も去声点の例もみとめられるもの)Ⅱ、上声点の例はあるが去声点の例はないものⅢ、去声点の例はあるが上声点の例はないものⅣの3種類に分類して付表に示した。声点は平・上・去・入・平声軽の順に1・2・3・4・Fでうつす(濁声点にはDを付す)。「暈字」「辞字」「人倫」等の門名は「暈」「倫」等と略す。◆は、字音の語形の第1拍が所属部のカナに一致しないもの。用例のしたのカタカナは和訓や字音であるが、【右コウ】などは漢字のみぎがわにそうしたカナが付されていることをあらわす。【同】のたぐいは、当該例のしたにある【同】が【ヲ】という訓をさしていることをしめす。

なお、ここにあげた字には、ほかに1声点の例もある。しかし、それら(1声点の例しかなかったものもふくめて)は、大抵つぎのように(1)呉音声調をあらわすとおぼしきものか(2)漢音でも広韻で上声以外の音も有する字の平声の方の声調を表示するもののみずれかであり、いまここで考察しようとしている問題とは直接かかわらないとおもわれるので省略した。

(1) 呉音

犯	犯1D過1D	(上48オ)	ホ豊)	ホムクワ
	犯1D罪1D	(上48オ)	ホ豊)	ホンサイ
	犯1D用1	(上48オ)	ホ豊)	ホンヨウ
近	近1親3	(下10ウ)	コ豊)	コンシン
	親1近1D	(下82ウ)	シ豊)	シンコン
	随3近1	(下119ウ)	ス豊)	スイコン

(2) 漢音平声

漸	漸 1	(上 10ウ	イ辞◆)	【右セム】
荷	荷 1	(上 21ウ	ハ植◆)	ハリス俗ハス【右カ】
重	重 1	(上 103ウ	カ辞◆)	カサヌ【右チヨウ】
駝	駝 1 D 駝 1	(上 40ウ	ニ疊◆)	ニフシ【右トタイ】

2. 上声点の分布について

まずは2声点の分布をみる。まず◆をつけたものとそうでないものとで分類してみると、◆対非◆の比は32(41)対13(21)である。ただし、音形から呉音の可能性のある例(5、8、28、73)と、音注から「己」の2声点である可能性のある例(39)とをのぞくと、30(39)対10(18)となる。

このように、ここで抽出した例にみるかぎり、2声点が付された例は◆グループのような、単字掲出の漢字(17、21、40、42、43、47、52、53、54、56、57、58、59、60、61、62、63)およびそれに準ずるとおもわれる部分におおく分布する。

単字掲出の声点とそれ以外のものとのあいだの対立は、同一の字が2声点でも3声点でも出現するものに典型的にあらわれる。たとえば、「柱」は単字掲出で2声点である(用例21)。「22 鼻×柱2(ハナハシラ)」「23 帆×柱2(ホハシラ)」のような、みだしの和語に対応する漢字表記に対して部分的に差声されたものもこれに準ずるとみられる。これに対して「25 麻1柱3」「26 槽1柱3」「27 刹4柱3」のように疊字門掲出のものは3声点であられる。「24 白4柱3(ハクチュウ)」のように疊字門以外でも、みだしが字音語の語形であるものは疊字門とおなじ性格のようである。また、「20

雑3尾2D」のような注文にたいする声点が疊字門におけるそれ(用例19)とまったく一致するのは疊字門の声点をうつした結果かとおもわれるゆえ、ここでは◆を付していない。

こうした分布状況は《単字掲出の漢音は、広韻の四声をその音形とともにしるすのが原則》との解釈をうらづけそうである。

しかし一方、単字掲出で3声点のものも皆無ではない。もっとも、「95 飯」し広韻で上去2音あり、ここではその去声を表示するための3声点とかがえられるゆえ問題はなくなる。また「89 兆」の3声点は字音注の声点「テ1ウ2」と一致するので、あるいは呉音かもしれない。このような、漢音声調の3声点である蓋然性のうすそうなもの(1、86、88、89、95、103、120)をのぞき、また、「114 象」(1声点と3声点とが併記されているが、「平声俗」との注記からみて1声点のほうは呉音声調とおもわれる)や「100 舅」「124 混」(ともに広韻で上声のみ)のように漢音の3声点であることはうたがいがいが、単字掲出以外の疊字門に3声点の例があるため、それらからの参照の結果である可能性があるものものぞけば、確実に単字掲出で3声点の例は少数(87、90、91)となってしまう。韻書の四声を表示するのが原則ならば、こうした全濁上声字も2声点になりそうなものであるが、個別の事情(誤点の可能性もふくめて)があるのだろう。

さて、そのように若干の例外はあるものの、単字掲出で漢音のものは韻書の四声をしめすが原則だとして、はじめに疑問点としておいた《調類表示の上声点と漢音声調表示の上声点との交渉》という点についてはどうであろうか。

「17 雑2」対「18 万3D雑3」「19 雑3尾2D」、あるいは

さきにあげた「柱」のような対立をもった例を重視すれば、そうした影響はなさそうだと判断することができる。「3 市2人×」対「4 朝1市3」や「11 厚2朴×」対「12 厚3地1」のような単字掲出以外の例も、そうした差声方針のちがいとして説明でき^(能)る。

もっとも、これには別の解釈もできそうである。それについては次節にのべる。

3. 去声点の分布について

前節にならって3声点の分布をしめすと、◆対非◆の比は14(17)対56(117)である。このうち、漢音の去声^(能)や呉音^(能)である可能性のあるものをのぞくと、10(12)対37(74)となる。

さて、単字掲出やそれに準ずるような部分の声点^(能)が、韻書の調類を機械的にうつしたものを継承しているとすれば、全濁上声の去声化を云々するための漢音資料とよべるのは、ほぼ畳字門ということになる。そしてこの畳字門では全濁上声字における去声点の比率は高松氏の観察よりもたかくなっている。はなから漢音の去声をしめず、または呉音の声調をしめす可能性のあるものをのぞいた畳字門における2声点と3声点の比は10(19)対37(68)となるのである。

しかし、さきの「量的には、略々、半ば」というのがどういふものを動定にいった結果なのか不明ゆえ、ここでの結果と単純には比較しがたい。畳字門(「仏法部」をのぞく)における漢字に付された声点が対象という論文にもつぎのようにあるから、あるいは畳字

門にかぎってのことかもしれない。

本書には、全濁上声の去声化ということがある。それは、全てではないけれども、略々、半数がその中国唐代長安音の影響下にある。そして、それに引摺られて、非全濁音でも、移動することがある。その点では、上声去声間の認識が甘いと言えるのが、本書の一性質であつた。^(能)

そして、もし畳字門のことであるにしても、ここで「非全濁音でも、移動することがある」とあるように、上声字全般に去声化がみられるとのことであるから、その点をわりびいての「半数」なのかもしれない。

ともあれ、今回の調査では、畳字門での全濁上声字に関しては上声点のさされる比率よりも去声点のさされる比率のほうがたかひのであった。そして先述したように、逆に畳字門以外では、単字掲出のものを典型として大部分が上声点であられる。

ここでは一応、前節の線にそって差声方針のちがひ(韻書の調類をしめすにすぎぬものか、漢音の声調を表示するものか)という点から、畳字門(それに準ずるとおもわれる非◆グループのもの)での状況を漢音の反映とみて、『色葉字類抄』における漢音の部分の全濁上声字のうち去声化したものは、実は半数よりもおおいのではないか」という推定をのべるにとどめる。

しかし、そうした把握に問題がないわけではない。《単字掲出で漢音のものは韻書の四声をしめすが原則》という解釈をうらづけるような用例(きはどの「柱」のように、単字掲出でも畳字門でもあられ、しかも両者の声点が2声点对3声点であるようなもの)は実は例がすくない。ゆえに、《こうした差声状況の差が、単字掲出や

それに準ずる部分とそれ以外の部分との差声方針の差にもとづく
とするには留保が必要だと判断も可能なのである。

たとえば「101 舅3 (シウト)」「102 舅3 甥2 (キウセイ)」「124
混3」「125 混3 雑4」のような、いずれもおなじ声点で安定してい
るもの(これとて少数なのであるが)の存在を重視すれば、「柱」
「雑」のようなものこそ例外的に韻書の調類をしめす声点がさして
あるのであって、畳字門であろうがそれ以外であろうが漢音の音形
のものは漢音の声調を表示しているのだ」とみることもできる。

そのばあい、高松氏が疑問の声点としてしめされた例のうち、い
くつかは呉音の声調を表示するものとして処理することができそう
だが、問題の全濁上声字は、さきほど畳字門だけでみたものよりも
上声調をおおく勘定することになる。

4. おわりに

前節までにのべてきたことをまとめると、つぎの2点になる。

(1)『色葉字類抄』の漢字にさされた声点のうちには韻書の調類を
表示するだけのものがある。

(2) そうした日本漢字音の声調とは無関係な部分を除去したばあ
い、漢音における全濁上声字の去声化の比率はかなりたかいかいもの
になると推定される。

注

(注1) 奥村三雄氏「漢語アクセント小考」三巻本色葉字類抄を中心として

「(調点語と調点資料」32、1966年2月)・黒沢弘光氏「前田
家本色葉字類抄畳字門の字音声点―清濁表示よりの考察」(『国文
学言語と文芸』54、1967年9月)・小松英雄氏「日本声調史論
考」(風間書房、1971年4月)・高松政雄氏「呉音声調史上の一
駒―色葉字類抄の声点」(『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』
28、1980年3月)・同「色葉字類抄の声点」(『調点語と調点資料
の研究』65、1980年11月)・同「前田家本色葉字類抄の声点につ
いて」(『岐阜大学国語国文学』15、1982年3月)など。

(注2) 注1高松氏1980年3月論文、22頁参照。

(注3) 頼惟勤氏「漢音の声明とその声調」(『頼惟勤著作集1 中国音韻論
集』汲古書院、1989年2月。もと『言語研究』17・18、1951
年3月)など参照。

(注4) 柏谷嘉弘氏「図書寮本文鏡秘府論の字音声点」(『国語学』61、196
5年6月)9頁参照。

(注5) 沼本克明氏「日本漢字音の歴史」(東京堂出版、1986年6月)、230
頁参照。

(注6) 沼本克明氏「平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究」(武蔵野
書院、1982年3月)、第一部第五章参照。

(注7) 木田章義氏・森博達氏「書評」沼本克明氏著「平安鎌倉時代に於る
日本漢字音に就ての研究」(『均社論叢』13、1983年5月)67頁
以下参照。

(注8) 注1高松氏1982年論文、9・10頁参照。

(注9) 奥村三雄氏、風間書房、1973年6月。

(注10) このような分類は、注1奥村氏論文の10頁にいう「a類」「b
類」の別にもとづく。◆グループには(その掲出語の漢字に単字単位
で差声された可能性のたかいかいもの)、非◆グループには(掲出された
字音語単位で差声された可能性のたかいかいもの)が集中するはずであ
る。《韻書の調類を表示するようなものがあるならば、◆グループの
ようなワクを設定することによって単字掲出のもの以外もひろえる

だろう」との意図から便宜的にこうした分類をあたえたわけである。

(注11) カッコ外は、ことなり字数。カッコ内は、のべ用例数。

(注12) この11の例について、注6文献には「仮名は合音のコウであるが上声の声点が増えられている。これは広韻の上声と対応するものであって、このように中に本来の上声を保つ場合も日本漢音の中には有ったのである。(1143頁)とある。《厚朴》という特定の語においては、漢音声調としても「本来の上声を保」っているのだ」ともよめるが、《ほかの「厚」の例がすべて聲字門であるのに対して、11のみが、ホ植物門「ホ、カシハノキ」に対応するものであり、かつ部分差声である」という点を考慮すると、ここでのような差声方針のちがいとみた方がよいのではないか。

(注13) 94、95、103、113、119、123、129、130、136、138、145、147、155、169、170、183、186。

(注14) 1、10、86、88、89、97、152、161、179、180。
(注15) 注1高松氏1980年11月論文、36頁参照。

付表 うえから順に当該字・用例番号・用例(所在)。所在表示は、

中田祝夫氏・峯岸明氏編『色葉字類抄研究並びに索引』(1964年6月、風間書房)による。

1、2声点・3声点

- 兎1兎3 D (下44オ サ動◆)
- 2兎2 觥1 (下85オ シ豊) シクワウ
- 市3市2人× (上5ウ イ倫◆) イチヒト
- 4朝1市3 (下22オ テ豊)
- 夏5半1夏2 (上42オ ホ植◆) ホソクミ【右ハンケ】

- 6遊1夏2 (上13ウ イ豊) 【右イウカ】
- 7晩2 D夏3 (上31ウ ハ豊) ハムカ
- 幸8行1幸2 (下61オ キ豊) キヤウカウ
- 9臨1幸3 (上74ウ リ豊) リムカウ
- 10極4幸3 (下11オ コ豊)
- 厚11厚2朴× (上42オ ホ植◆) ホ、カシハノキ【右コウ】
- 12厚3地1 (下10オ コ豊) コウチ
- 13厚3顔1 (下11ウ コ豊)
- 14厚3薄4 (下12オ コ豊) コウハク【チ】
- 15謹2厚3 (下62オ キ豊)
- 雉16雉2脯2 (上44オ ホ欽◆) ホシトリ【チフ】
- 17雉2 (下56ウ キ動◆) キシ・キ、ス【右チ】
- 18万3 D雉3 (上33ウ ハ豊) ハンチ
- 19雉3尾2 D (上70ウ チ豊) チヒ
- 20雉3尾2 D (下32ウ ア雑【扇】の注文)【右チヒ】
- 柱21柱2 (上20ウ ハ地◆) ハシラ【右チウ】
- 22鼻×柱2 (上23ウ ハ体◆) ハナハシラ
- 23帆×柱2 (上45オ ホ雑◆) ホハシラ
- 24白4柱3 (上25ウ ハ事) ハクチウ
- 25麻1 D柱3 (上33オ ハ豊) ハチウ
- 26槽1柱3 (下63オ キ豊) キチウ
- 27刺4柱3 (下110ウ セ豊)
- 杖28兵3杖2 (下98ウ ヒ豊)
- 29毬1杖3 (下58ウ キ雑) キウチャウ
- 30虎2杖3 (上3ウ イ植) イタトリ【右コチャウ】

31鹿4杖3 (上99オ カ雑)カセツエ【右ロクチャウ】

32投1杖3 (上73オ リ動「龍」の注文) トウチャウ

33投1杖3 (上63オ ト畳) トウチャウ

34答1杖3 D (上70ウ チ畳) チヤウ

35鳩1杖3 (下61ウ キ畳)

II、2声点

簞36簞2 D (下20ウ テ雑) テ1ム2

倍37倍2羅1糜2 D (上42ウ ホ動) ホロノハ【右ハイラマ】

塚38射×塚2 (下25オ ア地) アツチ・又イクハトコロ

已39已2 (上30ウ ハ辞) ハナハタシ【右キ】

幌40幌2 (上57オ ト雑) トハリ【右クワウ】

杜41杜2仲3 (上22ウ ハ植) ハヒマユミ【右ト】

杼42杼2 (下94ウ ヒ雑) ヒ【右チヨ】

棒43棒2 D (上27ウ ハ雑) 【ハサミキ】又ハウ

楯44步×楯2 (下20ウ テ雑) テタテ【右スキン】

紵45紵2布× (下32オ ア雑) アサヌノ【右チヨ】

肚46勒4肚2巾× (上26オ ハ雑) ハラマキ【右ロクトキン】

艇47艇2 (上83オ ヲ雑) ヲフネ【右テイ】

菌48菌2茸1 (下91ウ ヒ植) ヒラタケ【右クキンシヨウ】

菴49菴2菴2 (上22オ ハ植) ハチスノハナ【右タム】

薺50薺2尻2 D (下43オ サ植) サキクサ・又ミノハ

蜆51蜆2貝3 (下70ウ シ動) シタミカヒ【ケンハイ】

蟹52蟹2 (下94ウ カ動) カハ【右カイ】

距53距2 (下27オ ア動) アコエ【右キヨ】

釜54釜2 (上99オ カ雑) カナヘ・カマ【右フ】

婦55孕3婦2 (上23ウ ハ倫) ハラメ【右ヨウフ】

56婦2 (上114オ ヲ倫) ヲメ【右フ】

棧57棧2 (上92オ カ地) カハラノエツリ【右サン】

58棧2 (下14オ エ地) エツリ【右サン】

痔59痔2 (上66ウ チ体) チノヤマヒ【右チ】

60痔2 (下71ウ シ体) シノヤマヒ・又チノヤマヒ

芋61芋2 (上80オ ヲ植) ヲ【右チヨ】

62芋2 (上92ウ カ植) カラウシ【右チヨ】

稻63稻2 (上3ウ イ植) 【右タウ】

64稻2負2鳥× (上4オ イ動) イナオホセトリ【右タウ・フ】

65早×稻2 (上86オ ワ植) ワセ【右タウ】

否66実4 D否2 (下83オ シ畳) シツフ

簿67函2簿2 (上19オ ロ畳) ロフ

緒68由1緒2 (上12ウ イ畳) イウシヨ

69感2緒2 (上108オ カ畳) カムツ

饒70饒2別4 (下114ウ セ畳) センヘツ

71饒2行3 (下114ウ セ畳)

負72稲2負2鳥× (上4オ イ動) イナオホセトリ【右タウ・フ】

73勝1負2 D (下85オ シ畳) シヨウフ

父74高1祖2父2 (上55ウ ト倫) トヲツオヤ【右カウシ】

75異3父2 (上13オ イ畳) イフ

76 漁1父2 (下61オ キ豊) キヨフ

反77反2鼻2胡×徳× (上25ウ ハ事◆)

78 反2畔3 (上33オ ハ豊) ハンホ

79 反2魂1香3 (上34オ ハ豊) ハンコムカウ

80 往2反2D (上90オ ワ豊) ワウハン

解81解2纒2 (上63ウ ト豊◆) トモツナヲトク

【右カンラム】

82 解2纒2 (上106ウ カ豊) カイラム

83 解2脱4 (上110オ カ豊) カイタツ

84 解2谷4 (上110オ カ豊) カイコク

85 謹2解2 (下63ウ キ豊)

Ⅲ、3声点

丈86丈3D (上68オ チ員) チヤウ

朕87朕3 (上66ウ チ倫) チム

町88町3 (上68オ チ員) チヤウ

兆89兆3 (下21オ テ員) テ1ウ2

殆90殆3 (上68オ チ辞◆) 【右タイ】

蚌91蚌3 (上22ウ ハ動◆) 同【ハマクリ】【右ハン】

蛭92蛭2蛭3 (上55ウ ト動◆) トカケ【右エンテイ】

咀93咀3喰4 (上110ウ カ豊◆) カミハム・カミクラフ

【右シヨシヤク】

飯94強1飯3 (下6オ コ飲◆) コハイ、【右キヤウハン】

95 飯3 (上8オ イ飲◆) イヒ【右ハン】

杏96杏3子× (上93ウ カ植◆) カラモ、【右カウ】

97 杏3D葉4 (下58ウ キ雜) キヤウエウ

道98徹3道3 (下2オ コ地◆) コミチ【右ケウタウ】

99 左2道3 (下51ウ サ豊)

舅100舅3 (上23オ ハ倫◆) ハ、カタノウチ【右キウ】

101 舅3 (下70ウ シ倫◆) 同【シウト】其九反

【右キウ】

102 舅3甥2 (下61ウ キ豊) キウセイ

重103重3 (上30ウ ハ辞◆)

104 重3職4D (上69ウ チ豊) チヨウシヨク

105 珍1重3 (上70オ チ豊) チンチヨウ

上106馬2D上3 (下94オ ヒ雜「琵琶」の注文) ハシヤウ

107 馬2D上3 (上3ウ ハ3豊) ハシヤウ

108 路2上3 (上19オ ロ豊) ロシヤウ

109 上3党2 (下85オ シ豊) シヤウタン

寿110寿3域4 (下17オ エ豊「延齡」の注文) シユキキ

111 寿3域4 (下85オ シ豊) シユキキ

112 寿3成1門× (下69オ シ地) 【右ソウ】

113 寿3天1 (下81ウ シ豊)

象114象1・3 (下56ウ キ動◆) 平声俗キ2サ1

115 象3玉× (下1ウ コ地「氷1」の注文) シヤウ

116 象1・3 (下44オ サ動) サウ平声俗

117 象3玉× (下85オ シ豊) シヤウキヨク

118 象3常2 (下70オ シ動「猩1」【右セイ】の注文)

シ1ヤ1ウ2シ2ヤ2ウ2

後119後3涼1殿× (下2オ コ地) コウリヤウテン

120 玉4樹1後3庭1花1 (下58オ キ事)

121 後3生F (下10ウ コ疊)

122 後3来1 (下11オ コ疊)

123 後3素3 (下12オ コ疊) コウソ

混124混3 (下96ウ ヒ辞◆) ヒタス 【右コン】

125 混3雜4 (下11ウ コ疊) コンサフ

126 混3同1 (下11ウ コ疊) コントウ

127 混3沌3 (下11ウ コ疊) コカウ

128 混3合× (下12オ コ疊) コンカウ

【右ヒタゝケ、アハス】

近129近3 (上68オ チ辞◆) チカシ・チカツク

130 昵4D近3 (上70オ チ疊) チツキン

131 近3隣1 (下61オ キ疊) キンリン

132 近3境2 (下61オ キ疊) キンシフ

133 近3古2 (下61ウ キ疊) キンシフ

134 近3曾2 (下61ウ キ疊) キンシフ

135 近3習4D (下62ウ キ疊) キンシフ

坐136坐3事3 (下52オ サ疊) キウス

咎137咎3崇1 (下64オ キ疊) キウス

下138陸3下3 (上52ウ ヘ疊) ヘイカ

陸139陸3下3 (上52ウ ヘ疊) ヘイカ

仕140仕3官3 (下82ウ シ疊) 【右ミヤツカヒ】

薦141薦3举2 (下112オ セ疊) センキヨ

社142社3祓× (下80オ シ疊) セイシ

祀143祭3祀3 (下110オ セ疊) セイシ

紹144紹3介3 (下111オ セ疊) セウカイ

聚145聚3雪4 (下82ウ シ疊) シウセツ

荷146荷3擔1 (上110オ カ疊) カタム

被147被3盜2 (下98ウ ヒ疊) ヒタウ

項148項3年2 (上106ウ カ疊) カウネン

抱149抱3膝4 (上32オ ハ疊) ハウシツ

拒150拒3捍2 (下11オ コ疊) コカン

撰151朝1撰3 (下22オ テ疊) テンメツ

珍152珍3D滅4 (下23ウ テ疊) テンメツ

沌153混3沌3 (下11ウ コ疊) ヒンホ

牝154牝3牡2 (下98ウ ヒ疊) ヒンホ

甚155甚3口2 (下81ウ シ疊) シンホ

扈156扈3從1 (下10ウ コ疊) カンハツ

早157早3魃4D (上107オ カ疊) カンラウ

伴158早3滂2 (上107オ カ疊) カンラウ

伴159伴3D僧2D (上32オ ハ疊) ハンソウ

佇160伴3惹4D (上32オ ハ疊) ハンシヤク

佇161佇3留2 (上70ウ チ疊) チヨル

延162延1佇3 (下17ウ エ疊) エンチヨ

士163博4士3 (上32ウ ハ疊) ハクシ

第164貢3士3 (下11ウ コ疊) コヤ

第165昆1弟3 (下10ウ コ疊) テヤ

輔166姪4弟3 (下22オ テ疊) ホヨク

輔167輔3翼4 (上47ウ ホ疊) ホヒツ

輔168輔3弼4 (上47ウ ホ疊) ホヒツ

169 遁3 避1 D (上62ウ) ト疊 トンヒ
 170 遁3 世3 (上63ウ) ト疊 トンセイ
 静171 動3 静3 (上62ウ) ト疊 トウセイ
 172 躁3 静3 D (下52オ) サ疊 サウシヤウ
 動173 動3 静3 (上62ウ) ト疊 トウセイ
 174 鼓2 動3 (下12オ) コ疊 コトウ
 175 吟1 D 動3 D (下61ウ) キ疊 キムトウ
 善176 章1 善3 門× (下69オ) シ地
 177 善3 人1 D (下111オ) セ疊
 178 善3 語1 (下111オ) セ疊
 巨179 巨3 細3 (下10ウ) コ疊
 180 巨3 多2 (下11ウ) コ疊 コタ
 181 巨3 猾4 (下63オ) キ疊 キヨクワク
 182 巨3 害1 (下64オ) キ疊 キヨカイ
 造183 宮F 造3 (下17ウ) エ疊 エイサウ
 184 造3 化3 (下52ウ) サ疊 サウクワ
 185 造3 舟1 (下53オ) サ疊 サウシウ
 186 造3 次1 顛1 佈1 D (下53ウ) サ疊 サウシテンハイ
 怠187 遲1 怠3 (上69ウ) チ疊 チタイ
 188 重1 怠3 (上70オ) チ疊 チウタイ
 189 故3 怠3 (下11オ) コ疊
 190 延1 怠3 (下17オ) エ疊 エムタイ
 奉191 奉3 幣1 (上47オ) ホ疊
 192 奉3 勅4 (上47ウ) ホ疊 ホウチヨク
 193 奉3 公1 (上47ウ) ホ疊 ホウコウ

194 奉3 仕1 D (上48オ) ホ疊 ホウシ
 195 奉3 借4 (上48ウ) ホ疊
 196 返1 奉3 (上53ウ) へ疊 へムホウ